



立花の巻

立

〜13
3097
7止



門 へ 13
3097
卷 7

聖田川梅柳新書卷之六

東都 曲亭主人著

因を説果を示と楊柳塚

斑女前いづれの夜よもが梅うめ稚この墳かみ墓かみ小こ對たいひて。念ねん仏ぶつくく中なかれれ夜よの既すでに
深ふかききり。歸き雁げん稀まれ小こ飛とびび行ゆ客きやくの腸はらととおおし。朝あさ水みづ岸ぎしをを洗あらひ。旅たび泊とまりの枕まくらをを驚おどろろし
ままも星ほし落おちるる。漢かん火か遠とほく鐘かね度たく春はる鷗う鷺さぎく。今いま往むか古こ来き筑つく春はる秋あき花はな因いん紅べに糸いと散ちりる
流水りゅうすい委あひひ向むかう。觀かんぶぶれれの夢ゆめの世よ寤よめるる。又また夢ゆめの夢ゆめをを以もて。弥や陀た仏ぶつとと唱となぬぬ。又また唱となぬぬ。又また唱となぬぬ。
怪あやしいいるる。忽たち地ち墳つみの下した小こ声こゑありり。又また夜よもも小こ念ねん仏ぶつととああるる不ふ審しんととくく口くち成なり鉗くわんありり。
彼か念ねん仏ぶつもも心こゝろ地ち止とどままりり。又また弥や陀た仏ぶつとと唱となぬぬ。又また唱となぬぬ。又また唱となぬぬ。
眼まなこ前まへ柳やなぎの蔭かげ小こ朦もう朧ろうとと多おほくくつれれ。梅うめ稚こちちりり。斑いづれ女に前まへええととももつつるる。流ながるる。又また流ながるる。
のどく。逆さか縁えんの回まわりり。迷まよひひの雲くものままかかははひひ煩わづら悩なやみみの浪なみ高たかくくままるる。真まこと如ごとの月つきの影かげも

毎印所書

昭和九年
七月二十四日
購求



血斧鏡と刀小劍とく禱雨とす。雨と得るる。三尺萬物甦生。諸民歡樂。
 小自他平等昂身成佛のハの文字に鑿つけさ。鏡とも嗟峨の龜山
 ちる。古寺小寄進を平基盛の子。寺僧小購得く秘藏。いづれ子
 龍馬頭行盛小付。今の鏡と短刀これちる。あつ小次の年。惟永朝臣過あつ
 官職とす。と刺その身も隨く世を去小され。祖父惟通弱冠より。彼此を
 漂流し。治承のむ。ちゆ。び洛ま。ち帰。ち龍馬頭行盛小扶助。これ文治
 元年。八島の敗軍小。行盛被鏡と短刀。惟通小与。孤を托り。より。此兩種を
 う。い。て。ち家小。り。刀を授。く。兄弟と稱。鏡小因。く。夫婦とちる。これ龜の
 崇。い。よ。見孫小及。へ。張本。一期の禍福。これ。為小。釀。且。浅茅。沈。の
 二樹。或。摸。鏡の背小鑄。ち。松と梅。同胞の松。稚梅。稚。榮。枯。小。係。

惟永が龜と
 殺し、出で
 受。く。出で
 家守記。唐
 の感。通。手。中
 早。せ。し。た
 村人。岳。州。の。泥
 の龜。と。殺。す
 悪。報。を。受。く
 る。と。如。佛。同。目
 の。然。り。

又自他平等の短刀と惟永矣。場寄進とす。遂小その舊小返。と先人
 惟通。行稚を。出。お。せ。と。んと。欲。され。と。隨。つ。梅。稚。を。法。師。と。せ。んと。欲。され。と。も
 果。さ。ん。その。名。と。龜。と。い。ふ。毒。婦。の。為。小。家。と。さ。ち。祥。み。と。を。彼。夫
 龜の崇。この故小我小徳行の。と。も。衰。彼小悪行。れ。と。も。榮。又。是。因果
 の道理。小。あ。つ。と。且。祖父。惟通。内侍。所。と。救。ひ。と。り。功。小。と。り。と。り。又。一旦
 家。父。與。い。ぬ。ひ。と。と。と。と。鏡。の。因。縁。と。り。あ。れ。と。も。曾。祖。の。餘。殃。と。祖
 父。と。又。との。後。善。小。贖。盡。彼。龜。今。ち。家。の。護。神。と。も。ち。り。兄。君。と。り。と。り
 ち。父。の。仇。を。報。い。家。父。與。い。ぬ。ひ。今。生。小。若。を。修。と。り。人。の。末。世。小。人。の。善
 を。返。し。過。世。小。悪。を。と。り。人。の。今。生。小。人。の。悪。を。と。り。忠。臣。用。と。り。才。子。の。不。幸
 ち。る。も。憤。り。へ。う。と。す。と。負。當。得。失。を。と。り。一。生。の。と。り。世。を。憤。り。へ。う。の。見
 挾。し。賢。才。の。人。薄。命。ち。る。と。も。過。世。あ。り。と。り。と。り。善。の。と。り。後。さ。



海印新書



斑女前祝髪
 妙電屋と
 法号一鏡池
 の畔草庵を
 徴めよと
 松梅の明鏡
 自他平坐れ
 宝剣水中へ
 跳り入る終
 迹多きや
 こそふさ
 ちん

木村新書



毎卯折書卷之六



議區ぎくとまり。あつとども義時朝臣よしかたあそんのさびる気きをりき。相摸守時房さかもりよしかた義時よしかた武藏守泰時むさしのやすときを兩大將ふたごうしやうと定め東軍とうぐん板十いたじゆ騎きを起おこしこれをとひ
 小分せうぶんち。五月廿二日の曉あけ方かた小洛せうらくを望まをし推行おしやうしむ。ひりりひりり五月晦日ごごつごころより諸也しよあ
 の合戦くわせんもいまり。京方きやうかた散さんと小敗せうばい北きた。大炊おほいの渡わた株かぶ瀬せ川がわ蒲原はらへの殺所ころも
 阿容あひらとと攻破あはられ。六月九日むつきくにじちも。宇治川うぢがわをも輒渡ついでわたささ。東軍とうぐん既小洛しせうらく
 入いりてゆえ。小吉田せうきちだ松稚丸まつちまの合度くわどの合戦くわせん京方きやうかた忽地利たちまちちりをううちひて。
 事難ことづか義心よしかんの傳つたへ。大おほ小驚せうおどろ死して。粟津山田あはつやま赤塚あかづかとどくの黨とうを
 集會つひあひ父ちちの先見せんけん違ちがひ。編蕭牆へんせうきやうの下したより起おこす。朝家あそのちち大おほ呼よびと死し
 あり。松稚まつちま勅勘しやくかんの身みまりとも。推泰おしやす君きみのちち先途せんじゆ死して。仇人うらみ
 盛景もりかげ父子ふし成なり。忠孝ちゆうかう両りやうあつと全ませんと欲ほす。誘よびひとげとる。取と
 あり。勢せい僅ひん小十餘人せうじゆじゆじん主しゆ從じゆ素肌すみ歩あまま。近江路ちかみちより打うち出で三條さんじゆ

河原かわら小走せうしゆ著ちやく。このと死日しにちも。西山しやんざん小没せうぼつされ。松稚まつちま主しゆ從じゆ四辻しよつじの御ご
 所ところへ。泰やすらん。又また敵軍てきぐんもや懸かんとて。後ごも。京家きやうかの落武者おちたむしやと。一ひと
 十騎じゆきあり。三足さんそくり。是則これすなは別人りたうじんあり。赤石平あかひら九郎くわらう判はん
 官盛景くわんもりかげ主しゆ從じゆ。この盛景もりかげ不義ふぎの榮利えいりのちち女むすめ見けん龜翰かみかんも。只ただ願ねん院いん小せう
 以も隱謀いんぼうをし。北條きたじゆ氏うぢを滅めす。そのれ天下てんかの執權しやくけんと。較計かくけいが
 京方きやうかた每度まいど敗軍ばいぐん。宇治川うぢがわの防御ぼうごり。盛景もりかげの猛もう少せうの出来い。周章しゆぢやうて
 四辻しよつじ殿でんへも。戰場せんじやうより逐電しゆでん。家いへ喪なげ物網ものあみを漏もす。奥小異おくせういち
 也や。只ただ一足ひとそくも落おち。罵ののしり。未まも。松稚まつちま主しゆ從じゆ。仇人うらみ盛景もりかげを
 吐つと。嘔お吐つと。遮さ。一騎ひときも漏もす。討うち。矢庭やぢ子こ盛景もりかげを
 生拘なまか松稚まつちまの胸むね前まへに突つつけ。彼かれが。年とし末すえの隱かくを責せ問もん。小盛景せうもりかげ
 終つひ小匿せうかく。影かげの江えも。伊庭いぢ十郎じゆじゆらう欺あざむ死し殺ころす。伊い庭ぢ十郎じゆじゆらう欺あざむ死し殺ころす。

月影いさごと赤石の浦されと雲井の秋のちほもさうた。

とよも果ざる処小彼兵士ちうく走まあり。一人の弱官真先小ま、ま
山奥の前小頭首。煙くくくくへ臣の吉田女ね惟房が嫡子松推丸な
子。かーこれと君至首すの玉體とりて。賤たりの小肩を比膝を組を樂
まあひ后妃采女の中んどちたを闇せあひく。白拍子と小寵愛ま
聖王の直ちる政小背たぐ。頻小武藝を好せあひ倭人盛景。信婦電
鞠が舌頭小迷されく。忠臣を害。刺功ありく罪ちた武臣滅さんと
企おぼせく天照大神の山葉とく。却天神地祇小揃らと日本國中
小。小牙あうせあめあちたがてく小くせあひね臣が父たれを泊く
極小。練くまづりく用らと己を成るむ電鞠を殺く。君
のあ小殃の根おんとく小く成く盛景父子おのれが奸悪の度覚ん

る成怕もその是非を問どく。當中小惟房と殊一畢ね。成りく惟房
の忠心成抱く却逆臣とせられ。臣ホが身小及く追捕嚴重うりた。あ
ども父が忠死の顛末と中締んか小。一旦深山小脱れくやうやう性命を
ためら。今度の合戦官軍遂小敗れくつとすくやうやう警た勅勘の身
まことと推糸く。君の先途をえくまづり。父が忠を全せまほく
て。俄頃走とあるおくも。三條河原ま盛景主従が落ぶくと生拘り。こ
まを責問小彼父子が年末の奸悪雷小白状せり。原盛景ハ平形盛
が遺腹子よ。行稚と咄ま。のうく。臣が祖父卜部惟通彼命乞
巖山月林寺小登。聽て祝髪ちく。ひととども。身の行ようく。小
山を逐電して。信濃國の住人仁科盛遠が猶子と稱。仁科平九郎盛
景と名告く。鎌倉君小奉とく。その後科あつく。彼比を追放され



海防新編 卷之八

兼之の 松雅丸へ盛景
 鞠を討つ父の
 雪や巨仙輿に
 隠岐の國(やむく)



本朝書

蘇姐妃楊大直小勝もつり。あられの馬嶋驛の故事小做らぬ。ゆきび仰
を養く亀鞠が首を刎と。刃を並派東軍小志せし。義時派寛也と中
と一院のそのついと難義小思食く。何とも仰出さく。つりあつりりるを
松雅丸は理を盡し。斬らんと清めを頻るれ。出羽前司重房
内藏権頭清範ホ。ろろとも中勸ふよ。やうやう松雅がまうと
背よ。まうとめあやうと仰る。亀鞠のこの景迹をえ。齒と切り。竊
小父告の懐劍抜け。君を却し。まうとせ。身の危館を脱を
つとどつとも。まうと色も。頭も。名残を惜ま。あつりら
玉體小近つんと。小忽比の懐小声あり。鶏の音高く。ゆえ
か松雅吐嗟と跳つ。亀鞠を膝下小引伏せ。父告の懐劍を棄取
く首をゆと。搔落せ。栗津山田以下の島等。を萬歳をと。け

と抑らの父告の宝劍。一院當初惟房小賜り。去年の春惟房
朝臣竊小盛景亀鞠を刺んと思ひ定め。この宝劍を懐し。院泰
し。あつり。忽地鶏の声。あつり。松井源五。れを怪く。そやく
盛景小志し。これ。惟房朝臣志。遂む。討れぬ。その時一院
あつり。彼劍を亀鞠小賜り。あつり。小亀鞠。自今君と。知し
り。かの刑戮を脱んと。まうと。父告。忽地声。茂。玉體小近
ゆき。松雅丸。小曉得られ。あつり。この劍。あつり。首を刎ら
因果觀面のと。あつり。かくど。あつり。これ。併松雅の孝心。愛小天の祐を
く。父が冤枉を雲。圓の為。小奸と。鋤家の為。小仇を。撃。有。り
績。あつり。松雅丸。一院を。鳥羽殿。入。を。まうと。その夜。直。盛景
亀鞠が首級を。推。武藏守泰時朝臣の。小到。り。盛景。亀鞠

ちりの中陰果々後洛へうつりうつりあめ。帝四條院鎌久三年三院遠四
親王新院順徳帝のちのつりを受たせぬ。因東のまうくいとく。在位つづふ四個月
君在位十三年まうく。高倉院の孫茂仁親王を位小郎まうく。後堀河院とすまる。の
親王小侍あめ。四條院これまうく。その孤忠純孝を感いおぼ。父祖の舊領。加
恩の莊園叔箇所をまうくあつり。かぐく五位小ちこれ。松稚丸終
小絶る家と真く。君恩を拜謝しまう。是よりく吉田三位
惟徳と名告めあめ。粟津山田赤塚これの老黨のりもくまう。あり。
十餘人の壯士も。このまうくと仲や。衆皆処より走まうりて。故がと候まう。
今茲仲圓阿闍梨八十餘歳まう。迂化いぬ。よく惟徳朝臣のり。一日も
まう。母と妙龜尼を迎まう。せん。勝久光政軍女ホを。武藏國
下向しあめ。この序とり。梅稚丸を。社の神小祭る。ん。父奏し
まう。日数短く。浅茅が原まう。鏡池菴小到着し。慈母の恙き死を。故

ひ又その老驍あつるを悲と。十とせ小あまう。起外を。何れか。し。
伴ひまう。べ。下向まう。と。やえあめ。小。尼。一切けりあめ。ど。
これ今。弟が忠孝を。全。まう。世。出あめ。を。る。く。一日も生延ん。す
成願つ。殊。小。年。末。の。宿。願。を。遂。く。明日。の。西方。極。樂。小。至。ら。んと。何
の。違。あ。り。く。洛。へ。上。る。べ。と。宣。ひ。果。く。次。の。日。浴。く。新。に。袈。裟。法
衣。を。著。乳。盤。の。上。小。結。跏。趺。坐。く。念。佛。數。聲。唱。つ。大。往。生。を。遂。め。め。
辞。世。の。和。歌。あ。り。

あ。り。く。小。ち。ね。な。ま。ち。く。末。の。世。と。守。ら。んと。せ。り。あ。め。の。子。ま。ま。も
惟徳主従哀悼小堪む。遺言小従く。鏡が池のあつり。ちる丘の上り
莽サるぬ。へうの妙龜山これの墳墓まう。といひ。あひ。惟徳朝臣と
先考先妣春雨。鳩崎。玉柳ホ。追福の。小。墨。田。川。の。南。出。崎。小。一。字。の

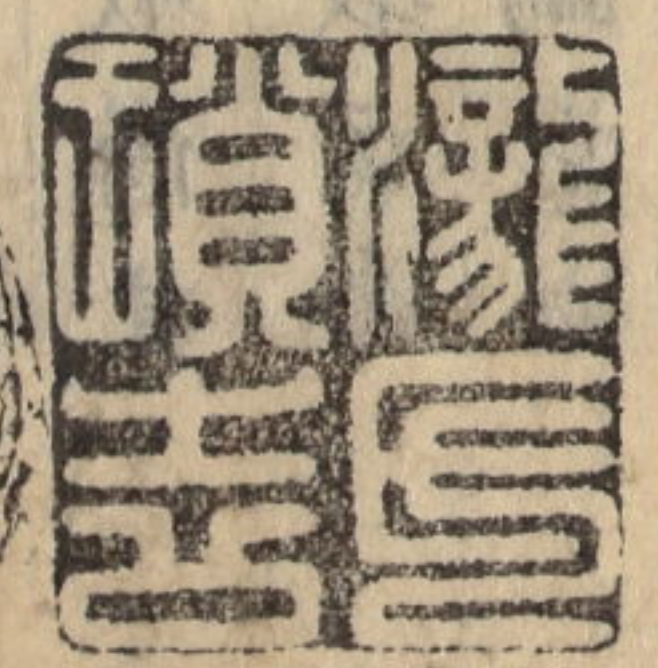
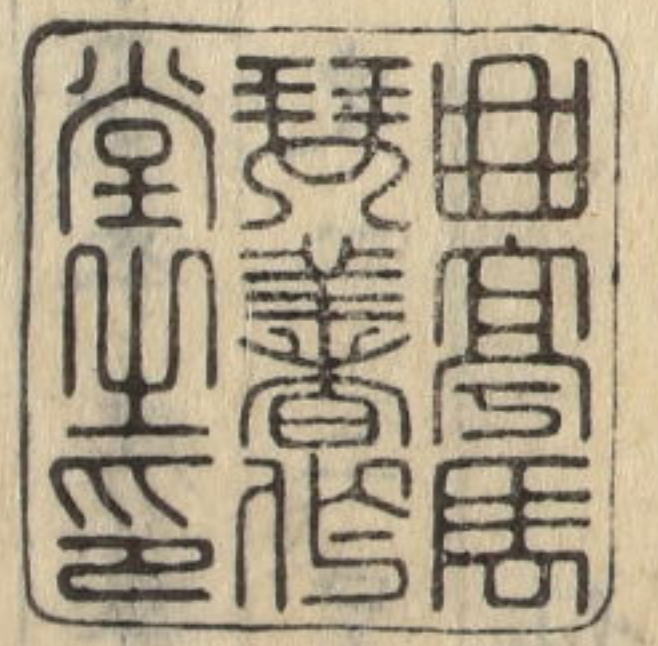
海印所書卷之三十一



毎小从く母小あしと母小ゆありの柵さうり。木母を梅とさるゆ。たしとさるは
 ありや。答て云俗説辨小湖海新聞を引て曰北朝山侍字致遠赴る石
 宗曰御自山路末云上曰自山路末。木公木母如何侍云。木公正殿
 歳木母正會春。木公松。木母梅也。稱音除中書
 今拵むる小梅あるひのそれを柵とりの。柵音ハ南院文又爾雅釋木等
 小つんえとり。史記貨殖傳小江南柵梓を主とあるも梅のり。母と母と字
 形相似とり。母を母小悞るり。母を母小悞るり。母を母小悞るり。母を母小悞るり。
 木母と稱さるる。後人の杜撰あり。その稱来る既小久し。柵和倍字款。
 字書まのえとるるところ。木母精舎の名目これこれをり。小ともいひに。
 梅若の梅とりの字をり。んと母のハ推量の説あり。とや梅小因と
 名つら教とも神宗梅を木母とさるは別小故あるべし。

右無用の辨小似れども聊或回を附録し。りく好古君子の一喙
 備ふ。余が管見。ちほ僻澆おほるべし。この書乙丑の冬。十二月上院をり
 欠く草を起し。今茲丙寅正月下院稿を脱も。あつと年の七月
 廿三日。更小校正もとく。巻のをりり。小のつけぬ。

兼筆隱居



飯台曲亭翁嘗所著之稗史文思奇絕義理深致乃
擇畫者而圖之擇劊劊而刻之繡梓既成翁手親校
正蓋曲亭翁家號瀧澤名解字瑣吉別號著作堂亦
稱簞笠隱居世人呼為馬琴子本房每歲得其所著
以刊布翁著述最多僅錄十之二三呈教云尔

曲亭主人著編題目

仙鶴堂識

○戲子名所圖會

已未冬出 全三冊

○小說比翌文

癸亥冬出 全二冊

○復讐奇譚稚枝鳩

甲子冬出 全五冊

○四天王剽盜異錄

乙丑冬出 全十冊

○墨田川梅柳新書

今年新版 全六冊

1190
三冊

世

世